
寒さ嫌いの氷魔術師

カフェイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寒さ嫌いの氷魔術師

【Nコード】

N8129Z

【作者名】

カフェイン

【あらすじ】

氷属性の魔法が得意な氷村正人、しかし寒いのが苦手という妙な体質を持っている。

舞台は魔法という概念が存在する日本の学校。彼はいったいどのような生活を送るのだろうか。

ブローグ スベテノハジマリ

「はあ、はあ、はあ・・・」

自分の声も聞こえなくなるような豪雨の夜、少年は逃げていた。幸いにも、この豪雨のおかげで足音も声もかき消されている。決してあてがあって走っているわけではなかった。

- 死にたくない -

その願いだけが少年の体を動かしていた。

いったいどれほどの時間を走り続けたのだろうか。

一時間、一分、一秒

迫りくる恐怖により時間の感覚さえ分からなくなってきた。どうしてこんなことになってしまったのだろうか。つい数十分前までは、大好きな家族とともにいつもと変わらず過ごしていた。

父と、母と、幸せな時間を過ごしていたのだ。

あの黒服の奴らが来るまでは。

突然、家の玄関が物凄い音を立て、吹っ飛んだ。

父はこのあたりでは一番の魔術師であり、国直轄の魔法防衛軍の小隊長だったので

一直線に玄関へ飛び出していった。

母は急いで少年をかつぎあげ二階の部屋に逃げ込んだ。

9歳の少年にはいったい何がおこったのかわからなく、母に聞いても「私達がぜつたいに守るから、大丈夫よ」としか言わない。

母がそういうなら大丈夫というなら大丈夫なのだろうと納得しようとしたとき、

「我らはロミスオンだ！」

その声を聞いたときの母の顔は頭から離れない。恐怖と絶望が入り混じったような顔をしていた。

それを聞いた後の母は少年に話すひまさえ与えないほど素早くを自らの血で

魔法陣を書き、何らかの呪文を唱えはじめる。

すると、少年の足元にも同じ模様の魔法陣が現れ激しい光を放つ。

「いったい何がおこってるの!？」

ついに耐え切れず少年は母に問いかけた。

少し寂しそうな表情をしたが、すぐに微笑み

「これからあなたはつらい人生をいくことになるかもしれない。それでも、決して

下を向かず歩き続けなさい。」

と言い、自分のつけていた十字架のついたネックレスを少年に渡した。

その時、部屋の扉が黒服の男たちによって破られた。

「じゃあね、必ず逃げて生き延びなさい」

それが最後に聞いた母の言葉だった。

あの黒服の男たちはいつたいなんだ

- ロミスオン - ってなんだ

そんなことを思いながら視界は真っ白に染められていった。

「ここは、外なのか」

さっきの魔法陣は移転魔法のものだったらしく、家の近くの公園に移転されていた。

しばらくの間呆然としていたが、すぐに走り出した。

母の言葉を思い出したからである。

少年の予想通りに遠くから「早くあのガキを捕まえろ」という声が聞こえてくる。

少年はひたすら逃げた。どこへ、わからない。ただひたすら遠くへ。いつたいこの先どうすればいいのか、わからない。何もわからない。

わかっていたのは逃げなければならない、それだけだった。

ブローグ スベテノハジマリ（後書き）

いきなりシリアスですいません。

どうも、どうも、カフエインと申します。

完走めざしてがんばります。

プロローグの後だけど・・・はじめに

どうも、この度初めて小説を投稿しましたカフェインと申します。
こんな新人ですがこれから読んでいただけたら嬉しいです。

さて今回は「寒さ嫌いの氷魔術師」の舞台設定を書こうと思います。
どうも、自分の力量じゃ小説内ではうまくかけそうにないもので・・・
では、どうぞ。

舞台設定

この小説の主人公が暮らしている世界は簡単に言うと、魔法が存在するのだけが違いの日本の平行世界のようなものです。
なので、基本人の名前は漢字です。決して欧風の名前が思い浮かばなかったのではないですよ（焦）

魔法について

魔法は基本属性の、火炎、水氷、雷鳴、風雲、大地の五属性と光陽

と闇陰の特殊二属性

から成り立っており、五属性ならば努力しようと思えばすべての属性を使うことができる。

ただし、特殊二属性は片方しか使うことができない。

別に闇陰属性は禁忌などではない。

ほとんどの魔法は一行程度の詠唱を唱えるが、無詠唱やかなり長い詠唱を使うこともできる。

しかし、その分多くの魔力を消費する。

二つ同時に使うこともできるが（これを二重魔法という）
デュアルマジック

やはりその分多くの魔力を消費する。

主人公、氷村正人ひむらまことについて

詳しいことはこれから書いていきますが、特徴的なのは・・・

1 冬、ていうか寒い嫌い

2 水氷属性が得意

です。

これ以上はネタバレになるので・・・

学校について

紅魔法高等学校はで1～12組までわかれている。

2・8組が火炎、3・9組が水氷・4・10組が雷鳴、5・11組が風雲・6・12組が大地を得意と

するクラスになっており、1・7組はすべての属性をある程度は使えるという組である。

各属性とも数字が低いクラスのほうがレベルが高い。

という感じです。

少しでも皆さんが楽しんでくれる小説を書くよう努力します。
それでは、本編で

新学期 まだ少し寒いこの頃

あれから7年過ぎたある朝

寒い季節の朝というのはほんとにつらい。

起きなければならぬとわかっていながらも布団を離すことができない。

最近では少し暖かくなってきたのだが、朝はやはり寒い。

「・・・・・・・・・・いつ・・・・・・・・・・く・・・・・・・・・・ろ」

もとより寒いのが嫌いな俺、氷村正人にとって、自分からこの布団エの中からでるのはかなりつらかった。

はあ、新学期なんてほとんどなにもしないようなもんだから10時ぐらいに登校だったらしいのに

「はや・・・・・・・・・・言つて・・・・・・・・・・遅れ・・・・・・・・・・」

そうだ、どうせ宿題を提出するぐらいだから10時でも問題ないじゃん。

ほら、寝る子は育つて言うし。絶対おそいほうがいいって。

「いいかげ・・・・・・・・・・きる・・・・・・・・・・最しゅ・・・・・・・・・・こく・・・・・・・・・・」

そつえば、さっきから周りがつるさいな。

人が気持ちよく寝てるときになんだったよ。
はあ、そろそろ起きるか・

と思い顔を上げると

目の前にビッシブドロップをくらわせようとしている姉がいた。

「まだ腹が痛え・・・」

そう言いながら、パンを食べる。ちなみに、俺はなにもつけないのが好きだ。

バターとかジャムとか意味わからん。

「あんたが起きないのが悪いんでしょうが」

そう言いつつパンをたべるのは俺の1つ上の姉の氷村葉月。

ちなみに、パンにはチョコレートクリームを塗っている。

っていうか姉よ、あんたは弟が起きなかつたらヒップドロップをしますのか

年頃の女がなにやってんだよ

「正人は昔から寒いのが苦手だからなあ」

と、父の氷村賢治がのんびりつぶやく。

父さん・・・そんなことより、まず姉さんの暴挙はスルーなのか。

「いやー、なんだかんだと言っていつも通りだからなあ」

・・・ちよつとまで。いろいろとつっこみたいが俺は言葉に出した覚えはないんだが。

心をよんだのか？

「もー、ちゃんと叱らなければだめでしょ、あなた」

そう言いながら次々と皿を素早く洗うのが母の氷村奏。

・ 母さんは比較的常識人なんだけど、いろいろと人外なんだよな・

えっ、どんなところが人外だって？

あそこで残像ができるくらいのスピードで皿を洗いながら喋ってるのを見るとわかるよな

もう気づいてる人もいるかもしれないけど、表記が姉さん、父さん、

母さん、と「義」という文字がついてないのだ。

7年前、正人の本当の両親の平木直人と平木彩音は死んだ。
いや、殺された。

あの豪雨の夜、ついに力尽きた正人は路上で倒れてしまった。

その倒れたところが、この氷村家の前だったのだ。

次に目を覚ましたのが氷村家のソファの上だった。
ここがどこかわからず困惑していると、

「おっ、目が覚めたみたいだな」
とのんびりした口調で話しかけてきた。

「……じいじは」

「氷村家だ。ついでにいうと俺は氷村家頭首の氷村賢治だ、なんつってな」

今思えば、あれは俺が話しやすいようにする気遣いだったのだろう。

「家のまえで倒れてたけど、なにかあったのか」

正人は何も言わなかった、いや言えなかった。

「言えない、か。家族はどうした」

そう聞かれてはつとした。

思い出したのだ、あの夜の出来事を。

こらえきれず、すすり泣きながら

「たぶん……殺……された」

と言つと

「何っ……そうか、嫌なこと思い出させてごめんな」

と言って正人の頭を撫でた。

とても優しい手だった。

正人は泣いた。ただただ叫ぶように泣いた。

賢治は何も言わず頭を撫で続けていた。

しばらく泣いた後、賢治は

「お前、どこか行くあてはあるのか」と聞いてきた。

もちろん9歳の正人に行くあてなんか知るはずもなく首を横に振るしかなかった。

すると、次には驚くべき言葉が返ってきた。

「よし、じゃあ俺と家族になろう」

意味が分からないと思ったのが本音だ。それもそのはず、あつて数分しかしてない見ず知らずの男にいきなり家族になろうと言われても驚くだけだ。

「・・・どういう意味」

「そのままの意味だ、戸籍上、養子ってことになるが気にしないでいいぞ」

「そういう意味じゃないつ。どうして会ったばかりの子どもにそんなことを言う」

正人はつい叫んだ。

「困ってる人がいれば手を差し伸べれる人になりなさい、ってのが俺の父のことばでね
俺はそれをじっこうしているだけだ。もっとも今度は規模がちがうけどな」

言葉が出なかった。

同時に偽りの優しさではなく、本当に心から優しい人なんだと理解した。

「で、家族に家族になるのか、ならないのか」と微笑みながら聞いてくる。

「でも、いいのか、僕みたいな知らない人を家族になんて」

「さっきからいいって言ってんだろ」

心が揺らぐ。

「でも、あなたの母さんや子どもには迷惑じゃないの」

「そんなこと説明すればいいだけじゃねえか」

また心が揺らぐ。

「でもっ・・・僕、寒い嫌いだし、朝とか起きられないよ」

「面白いやつだな、お前。朝ぐらい起こしてやるよ」

そして優しく

「これからは俺がおまえの父さんになってやるよ」
と言った。

我慢できずついに飛びついてしまった。

こつう感じで俺は氷村正人となりこの家族の一員となった。

みんな、本当の家族のように接してくれるので俺は義父さん、義母さんとは呼ばないのだ。

やべっ、いろいろ思い出してるうちにもうこんな時間になっちゃった。

急がないとまずいかな。

急いで用意を済ませ俺は学校へと急いだ。

再会 久しぶりの親友たち

学校に入るともう大半の生徒が登校していた。

みんな春休みにどこへ行ったとか、何してたとかいろいろ話している。

春休みね、寒くてあまり動く気にはなれなかったけどな。

まあ、冬休みよりは良かったが。

と、そんなことを考えていると

「正人、何考えこんでるんだい」

「別になんでもねーよ。春休みは寒かったなーって思い返してただけだ。」

「正人らしいね。僕はどっちかっていうと暑いのは苦手なんだけどな」

と、にこやかに話しかけてくる男がいた。

こいつは橋野俊介^{はしのしゅんすけ}去年、一緒の3組にいた俺の親友だ。

「で、正人はちゃんと水氷属性以外の魔法も練習してきた？」

「当然だろ、去年いつしよに1組に上がるって約束したからな」

そつえば、クラス替えのことはまだ話してなかったな。

クラス替えっていうのは、新学期と十月頃に行われるんだけど、なかなかハードなテストなんだよな。

たしか、筆記、各属性の魔法レベル、特殊二属性の強さ、体力・精神力・魔力測定、あと、戦闘考査だったっけな。

最初の4つは全部1日で終わらせる楽なほうなんだけど、戦闘考査はそれだけで1日を使うかなり大がかりなテストなんだよな。

一応この学校に入学する時にみんな魔法防護服を作ったんだけど、それでもダメージを完全にまではふせないんだよな。

ちなみに去年の10月のクラス替えでは、俺は火炎のつよさが合格基準にいかなく、俊介は雷鳴の強さが足りなくて3組になったんだ。魔法を使い始めの頃はなんで火炎が使えないのかわからず、大泣きしていたのはいい思い出だ。

「やつほー、正人。俊介くーん。」

「よう、光。相変わらず元気だな」

「おはよう光さん、ほんとに元気だね」

「だって私は元気なのが取り柄だから」

と、元気よく話しかけてきたのは、自他ともに認める元気っ娘^{ふじたひ}藤田光^{かる}だ。

光も俊介と同じ3組の親友だ。

ちなみに、元気なその性格と可憐な容姿から男子からの人気はとても高い。

すでに、何回も告白されているらしい。

前に何度か俺や俊介とかがいるとにラブレターを渡していたやつもいたんだけど、なぜか光は困ったような顔してこっちを見てきたんだよな。

俺には見てほしくなかったのか？

「正人も俊介君もテスト大丈夫そう」

「ああ、今度こそは1組にあがってやる」

「そうだね、春休みに結構練習したから1組いけると思うよ。」

「二人ともさすがだね。私はやっぱり風雲属性が苦手で厳しいかも」

「大丈夫だつて。3人一緒に1組に行くって言ったら、テストは明日からだし今日一緒に練習しようぜ」

「なにより、光さんは正人がいればだいじょうぶだしね（ボソッ）」

「っ・・・／／／」

と、俊介が言うとき光の顔は真っ赤に染まっていった。聞こえなかったが俊介は何を言ったんだ？

そんなこんなで時間は過ぎていき・・・

- 始業式の時間になりました生徒の皆さんは15分後に体育館に集まってください -

と、放送が流れた。

「そろそろ時間だな。行こうぜ俊介、光。」

「そうだね、遅れたらいろいろ面倒くさいから」

「はやく行こ。正人、俊介君」

「あゝ長かった」

いくらなんでも長すぎだろ。校長なんて同じところ4回も話してたぞ。

途中で貧血で倒れた生徒がいたのに構わず話し続けてたのは俊介でさえ驚いてたよな。

あの校長、若いときは爆炎の獅子とか呼ばれてたらしいけどほんとなあ

まあ、この学校の校長やってるぐらいだから凄いなとは思っけど。

「流石に私もつかれたよ。俊介君は平気なの」

そう、もつとも不思議なのが俊介のやつが貧血くんがでる以外は顔色一つ変えずに聞いてたことだ。
いったいどんな体のつくりしてんだよ。

「まあ、長かったけど全然大丈夫だよ。」

と、相変わらずさわやかに答える俊介。
ほんとに大丈夫そうだな。嘘を言ってるようにも見えないし。

「まあこれで今日の学校も終わりだし、はやく魔法の練習しようぜ。」

「僕はやめとくよ。今日、家に誰もいないんだ」

「そうか、じゃあ今日は二人だけだな、光」

「う、うん、そうだね／＼」

こうして、俺と光は7時ぐらいまで魔法の練習をすることにした。
また顔真っ赤だったけど光のやつ大丈夫なのか。

クラス替え 1日目

クラス替え試験1日目

「おはよう正人。」
登校していると光が話しかけてきた。

「おはよう、光。調子はどうだ？」

「昨日、正人に教えてもらったから大丈夫だよ。あの後、部屋でこし練習したら、かなり使えるようになったよ。いす壊しちゃったけど」

「いや、部屋の中で風の魔法使うなよ！使うなら外ですればよかったじゃねーか」

ときどき、光は天然になるんだよな。そんなもって、へんなところで頑固にもなるし。

そんなことを喋りながら歩いているといつの間にか学校についていた。

「おーい正人、光さん、掲示板に筆記の教室と今日の時間割が書いて

てあるから見にいこう」

「わかった。光、行くぞ」

「うん」

俺たち3人は名前が「ひむら」、「はしの」、「ふじた」と名前が近いので3人とも同じ教室でうけることになっていた。

「えつとなになに、9時30分まで筆記で、それから昼までに各属性のレベルと特殊2属性のレベルか。」

「昼からは体力・精神力・魔力を測るんだね」

「筆記以外は僕たちみんなバラバラになっちゃってるな。12時30分に屋上で待ち合わせして昼ご飯食べないか？」

「それがいいな。じゃあまずは、筆記早く終わらせようぜ」

「「ああ（うん）」」

第一門 基本五属性をすべて答えなさい。

簡単だな。答えは、火炎、水氷、雷鳴、風雲、大地、と
案外楽だな。しばらくはこんな問題が続くのか・・・

おっ、少し難しくなってきた。

台二十四問 水氷属性の利点を二つ書け

俺にとっては簡単なんだよな。状況に応じて”水や氷にかたちを変
えることができる”と、”ほかの属性より比較的消費魔力が少ない
”かな。

このあたりから少しずつ難しくなってきたな・・・

これで最後か・・

第四十問 この学校の校長の名前を書け。

・・・・・・・・やばい、思い出せない。

えっと・・・・・・・・なんだったっけ。だめだ全く出てこねえ。

もういいや爆炎の獅子って書いとけば部分点はもらえるだろ。

筆記試験終了

「正人、俊介君、できた？」

「僕はそこそこかな。最後の問題がわからなかったけど。」

「俊介もか、俺も最後の問題がわからなかったよ。光は？」

「私もわからなかった。いったいどんなまえなんだろうね」

結局、校長の名前はわからずじまいであった。

ほかの生徒たちも、どうやらわかってないみたいだ。

あの問題答えたの何人いるんだろうな。

各属性のレベルでは、俺たち3人とも苦手な属性も問題なし、とまではないがよかった。

一つ気になったのが、俺は光陽属性がとて高くなっていると言われたことだ。

戦闘考査さえよければ1組には余裕で入れるだろうとも言われた。

そして、1日目が終了した。

クラス替え 1日目（後書き）

終始グダグダでごめんなさい。
切に文才がほしいです

クラス替え 2日目 (前書き)

やっとちゃんとした魔法が出せます。

違和感なく書けてるかどうかわかりませんがどうぞ見てやってください。

クラス替え 2日目

その日の夜

クラス替え試験一日目も無事に終わり、正人は家で明日の戦闘考査のために部屋で筋トレをしていた。

あのような事件になっても身を守るように、正人は普段から筋トレをしている。

が、明日は大事なテストのため、普段より回数を多くしている。

「97・・・98・・・99・・・100!、腕立て100回終わりつと。次は腹筋を、」

腹筋をし始めようとしたとき、

「正人、入るよ」

と、姉の葉月が入ってきた。

「どうしたんだよ姉さん。俺、今筋トレ中なんだけど」

「いや、我が愚弟の今日の結果を聞きたくてね」

「フン、どうせ俺は姉さんみたいに満点とかとれないですよーだ」

ちなみに、言い忘れていたが姉さんも紅魔法学校に通っていて、次で三年生になる。

しかも、成績優秀、運動神経抜群ときた。

一番得意な属性は風雲でもちろん1組にいた。どうせ次も1組だろう。

家で弟にヒップドロップかます人が1組なんていまだに信じられないが・・・

「今回は私満点じゃないわよ。一つだけわからなかった問題あったし」

「珍しいな、姉さんにわからない問題があったなんて。何がわからなかったんだ」

「あれよ、最後の校長の名前書けてやつ」

姉さんでもわからなかったのか・・・ 本当にあの問題とけた人いるんだろうな？

本当に全員不正解じゃないかと思えてきたぞ・・・

「そうだ、明日の戦闘考査のためにちよつと組み手でもしない」

「いいぜ。今日こそ姉さんから一本とつてやるよ」

「まっ、ちよつとは期待しとくわ。先に庭にいるから」

と言って姉さんは部屋から出て行った。

俺と姉さんの戦績は俺の全敗。

光陽魔法で強化した突きや蹴りの威力はハンパない（もちろん、俺も使っているがそれ以上の威力）

毎回、最後には俺が地に伏せてるんだよな。

「よし、今日は一本取りますか」

自分に喝を入れて俺も庭へ向かった。

「正人、そのほつぺどうしたの？」

「真っ赤だね。葉月さんと組み手でもしたんじゃないのかい」

「俊介、正解。風使ってスピード上げた突きを打たれた。」

わかってると思うが、結果はまた俺の負け。

今回はいいとこまでいったんだけどなあ。

姉さんの体勢が崩れたと思い、おもいきり蹴りを放ったら軽々つかまれて、さっきの隙はわざとなんだと理解したとたん、風で体を浮かせられ一気に殴られた。

「そろそろ時間だよ。後でヒールしてあげるから今は我慢してね。」

「頼むわ、光。この顔で試合なんてしたら間違いなく相手に笑われるだろうからな」

戦闘考査は一人に三回の試合があり、その試合での結果だけではなく、内容も問われる。

つまり、負けてもいい試合をしていれば好評価をもらえるのだ。

逆に勝つても力任せなどの何も考えない行動とかは減点対象となる。

俺は先生からの一通りの説明を聞いてから光にヒールで治してもらい、三人とも一回戦の会場が別々のところだったので別れた。自分の会場に行き試合表を見てみると。

「俺の相手は・・・げっ、三回戦で俊介とかよ。」

なんと、三回戦の相手が俊介だった。しかし、俺はワクワクしていた。

「これは負けらんねえなあ」

俺は一回戦も二回戦も余裕で勝ち、（どうやら、俊介も光も全勝しているようだ）三回戦へと臨んだ

そして三回戦・・・

「各自、魔法防護服は大丈夫だね」
審判が確認する。

「俊介、手加減はなしだぜ」

「僕だって負けるつもりはないよ」

「二人とも、がんばって」
遠くから光の音がする。

「では、構えて……………始めっ！」

先手は俺が取った。

「まずは…………我が手に宿れ氷河の剣！」
手に氷の剣を出現させ一気に俊介につっこむ。

「（速いつ）くっ、風よ」

俊介は短い詠唱で空中に回避した。
俊介のやつ、風雲属性はあまり得意じゃなかったはずなのに。

「こんどはこちらからいくよ。焼き尽くせ」
俊介は空から大きな炎を出してきた。

「荒れ狂うは怒濤の吹雪」
両手を突き出して力を込める。

スノウウェイブ
「雪の津波」

俺の一番の得意技だ。
冷気の波動が俊介の炎を打消し突き抜けていく。
氷が俊介を包み込んだ、と思ったがそこに俊介はいなかった。

「さすがだね、でもこれなら…………」
俊介はすでに地上にいており、右手を構え、左手でそれを支えてい

た。

まさか、あの瞬間に風を使って降りてきたのか。
なんて奴だよ。

「貫くは爆炎の流水、矛盾するものよ一つとなりて敵を滅せよ」
まさか、二重魔法^{デュアルマジック}

一気に決めにかかるつもりか。
これはまずい……

「水炎の大槍！」

ものすごい音を立て、こちらに迫ってくる火炎を纏った水の槍。

ドガアアアン

これまたものすごい音がたち正人の近くは煙に包まれた。

「やったか……」

俊介は動けない。煙のせいで動けないのだ。

「今のは……危なかったぜ」

煙の中から正人の声が聞こえた。

俊介は流石に驚いた。

いくら正人でもアレを受ければ無事では済まないと思ったからだ。

「ど、どうして」

「簡単だ。まずは自分のまわりを熱で覆い、さらにそのまわりの温度を急激に下げたんだ。一瞬とはいえ流石に一度に火炎、水氷、大地の三つの属性を使うのはきつかったが」

温度差で爆風をうけながしたのか。水は急激に冷やされ、さらに摩擦で擦り減っていったのだろう。

だが、正人はもうボロボロのはず。ここで僕が決めれば・・・

「風よ雪よ、今我に集いその者を凍てつかせよ」

正人が詠唱をとなえているだつて！

しかも二重魔法！
デュアルマジック

まてよ・・・風と氷、そうか。

すでに、この空気を支配していたんだね。
やっぱり正人にはかなわないなあ。

エターナルブリザード
「永久吹雪」

俊介の意識はそこで途切れた。

クラス替え 2日目 (後書き)

ちなみに正人は二年生です。

詳しい戦闘のことは次に書きます。

クラス替え 2日目続 光の戦い

正人は必死だった。

俊介の放った「水炎の大槍」は氷の壁を作った程度じゃ、防げそうになかったのだ。

（しかたねえ・・・）

まず、正人はあたり一帯を得意の水氷魔法で冷やし（かなり戸惑ったが）、2 mほどまえに氷を張った大地の壁を出現させる。水炎の大槍は水の部分を氷らせ、摩擦により表面を少し削っていた。

しかし、完全に削ることはできず、勢いを残したまま壁に衝突・・・・する直前に、正人の周囲の温度を一気にあげる。

こうすることにより、温度差で気流が変化し技の衝撃をそらしたのだが、完全にはそらせなかった。

しかし、直撃よりはましであったために倒れることを防いだ。

次に正人は、爆発によってできた気流と、技が壁に衝突したときに舞った氷の粒を一気に集め、エターナルブリザード永久吹雪を放ったのだ。

この技は、大量の魔力を使わなければ放てないのだが、壁に張らせておいた氷と、氷った水炎の大槍の衝突によって大量の氷の粒が舞い散り、さらに爆発によって風が起こったので、少ない魔力で放つことができた。

しかし、他にも大量の魔力を使い、苦手な寒気に長い時間触れていたため、

「よし・・・なんと・・・か勝つ・・・」

ドサッ

勝利したものの、正人も倒れてしまった。

ここは、紅魔法高等学校、臨時保健室。
戦闘考査の日は、けが人が続出するため、通常の保健室だけでは治

療が追い付かず、別の場所に治療施設を作る必要があった。
ここは、そのための場所だ。
ちなみに、体育館を丸ごと使っている。

「・・・・・・・・ん、ここは、」

「おはよう、正人。ここは臨時保健室だよ」

「そうか、確か魔力の使い過ぎでぶっ倒れたんだっけ。結果は。」

「君の勝ちだよ。あんな技使っというてよく言うよ」

「お前のだつて危なかったじゃん」

どうやら、魔力もそこそこは回復しているらしい。
よく見れば、医療スタッフが50人ぐらいもいる。

俺は30分程倒れていたらしい。
案外眠ってなかったな。

「正人、そろそろ光さんの試合が始まるよ。見に行かなきゃ」

と、俊介があわてたように言う。

もうそんな時間だったのか。早く見に行つてやらねえと。

「よし、早く見に行くか。体は大丈夫か？」

「僕は大丈夫だよ、正人のほうがまずいんじゃない」

「まだ少し冷えるが大丈夫だ」

と、笑いあいながら、光の観戦へと向かった。

俺たちがつくと、ちょうど始まる直前だった。

「どうやら、ギリギリ間に合ったらしいね」

「ああ、なんとかな。それで相手は誰だ？」

「あれは……去年の4組の須藤星姫さんだね」

四組の須藤か、確か去年、4組」で学級委員やってたって聞いたことがあるな。

4つてことは雷鳴か……

光はどう対処するんだろうな。

「では、構えて……始め！」

先手は、須藤が取った。

「貫け！、はああああ」

5本の雷の矢が光に向かって飛んで行った。

光はそれを風を使い飛んでよけた。

光のやつ、風雲属性うまくなってるじゃないか。

「銃魔法！撃ち出すは灼熱の散弾」
ガンマジック

出た、光の銃魔法。

光の魔法は魔法具の双銃に自らの魔力を込めて撃ち出すという遠距離系の魔法だ

あとは、撃ち出す弾の属性と種類（光線や放射型など）を決めて撃ち出すだけだ。

須藤もそれを時には避け、時には打ち消しながら光に突貫していった。

「銃ならば、接近戦は苦手なはずですよ」

「言い右手は雷、を左手には炎を纏い接近戦に持ち込んだ。確かに普通ならそうなんだが、光は違うんだな。光の双銃の凄いところだよ。」

「シローデ弾変更、撃ち出すは冷氣と熱波の放射」

「・・・っ！」

光は銃から50〜80？ほどの小さな放射弾を出し、刀のようにして須藤の打撃を防いでいる。これが光の凄いところだよ。

「遠距離オンリーだけじゃなく、弱点である接近戦の専用の技もあるという臨機応変なところだ。しばらく接近戦が続いたのち。」

「厄介ですね、その銃」

しびれをきらした須藤が風を使い一気に距離を開け、

「雷鳴轟き、空を裂きなさい。ボルトアロー雷撃の弓！」

「巨大な電撃の弓矢を出現させ、放つ。」

「かなりの威力だ。くらったらひとたまりもないぞ。」

「爆風よ、われに力を」

デュアルマジック

「二重魔法によって、火力をつけた風の弾を斜め後ろに撃ち出し、光は斜め前へ勢いよく飛び技を避けた。」

そして、その勢いのまま相手に近づき、押し倒し、額に銃口を突き

付け、

「私の勝ちね」

と、宣言した。

「降参です。とても強いですね」

須藤の宣言により、光の勝ちが確定した。

試験終了 打ち上げみたいなもの

光の試合が終わり、俺と俊介は光に会いに行こうとしていた。

「光のやつ、銃の扱い上達してたなあ」

「ほんとにね。特に最後の後ろに撃って前に飛び出す技はびっくりしたよ」

「あんな使い方するとは普通思わないよな」

「そうだね。あつ、光さんだよ」

「それと、横にいるのは、須藤か」

光は須藤と喋りながら歩いていた。

どうやら、あの試合の後に仲良くなったらしい。

光はすぐに誰とでも仲良くなるんだよなあ。

「あつ、正人。私の試合どうだった。」

「凄かったぞ。そっちの須藤、だっけ、流星は元4組の委員長だっただけあって雷鳴の強さは一級品だな」

「僕は雷鳴が苦手だから、余計にそう思ったよ」

「ありがとうございます。でも光ちゃんやあなたたちに比べたらま

だまだですよ。あと、私のことは星姫でいいですよ。そのほうが呼ばれ慣れてますし」

「そうか。なら俺も正人でいいぜ」

「僕も俊介でいいよ」

案外、星姫は話しかけやすいやつだった。

元委員長って聞いたからカタブツな人かと思ったけど、全然ちがうな。

どっちかっていうと、おしとやかかって感じかな。

こうしてクラス替え試験は終わった。

どうやら、結果は明日に発表されるみたいだ。

こんなに生徒がいるのによく一日でまとめられるよな。
ちよっとこの学校に関心。

「最後に、今回の試験の結果は明日校舎に張り出すので、明日はそれを見て自分の教室に行くように」

いまだに名前がわからない校長の話が終わり、解散となった。

「やっとクラス替え試験終わったなあ。そうだみんな、どこかで遊ばないか」

「いいね。僕もそんな気分だよ」

「私も行く。星姫ちゃんもいく？」

「私もいいんですか！ぜひ行きたいです」

でも、どこで遊ぶかなあ

いまは3時30分で微妙だし。

他にいくあてもないしなあ

そんな感じで、遊ぶ場所について悩んでいると。

「僕は久しぶりに正人の家にいつてみたいな」

「それいいね。私も一度も行ったことないから行ってみたいかも」

「正人さんの家ですか、楽しそうです」

そういえば前に俊介が俺の家に来たのって11月ぐらいだっけ。
光は一度も来たことないし、星姫はさっき知り合ったばかりだしな。

そうだな、母さんにも今日のこと知らせたいしそれでいいか。

しばらく、考えた後、

「そうだな、じゃあ俺ん家に行くか」

ということ、氷村家に行くこととなった。

場所は変わり氷村家

「ただいま母さん、友達入れるよ」

「おかえり正人、あら、俊介君じゃない、久しぶりね」

「お久しぶりです」

「ゆっくりしていつてね。あら、そちらの娘たちは」

「藤田光です。よろしくお願いします」

「私は須藤星姫です。よろしくお願いします」

「二人とも礼儀正しいわね。正人も見習いなさいよ」

「なんで俺なんだよ。リビングでいいよな」

「ええ、ジュースとか取ってくるから、案内した後手伝ってちょうだい」

「了解です。じゃあ、入ってくれ」

「「「おじゃまします」」」

正人は荷物を置いた後、二回に上がっていった。

「ここが正人さんの家ですか。そういえば俊介君は何回か来たことがあるんですよね」

「うん、5、6回あるよ。一年の初めの時からの仲だからね」

「私も一年の夏休みの前ぐらいから一緒にいたけど、ここに来たことはなかったなあ」

「高校生で家で遊ぶ機会ってあまりないですからね」

「遊べる日はカラオケとか行ってたもんな。ほい、ジュース」

いつの間にか、正人と母の奏はジュースとグラスを持って降りてきていた。

奏の手には皿に盛られたたくさんのお菓子がある。

「それで、今日の試験はどうだったの」

「俺は何とか俊介に勝ったよ。最後は二人とも倒れちまったけどな」

「私は光ちゃんに惨敗でした。私はまだまだですよ。」

「そんなことないよ。星姫ちゃんの電撃すごかったよ。あれなら、1組に入れるよ」

「そうだね。4人全員で1組に入れたらいいよね」

そうだな。せっかく星姫とも仲良くなったんだし、4人一緒に1組入りたいよな。

筆記もまあまあだったし大丈夫だとは思っただけだなあ。

「ただいま」

ん、姉さんが帰ってきたみたいだ。
なんか、うるさくなりそうだな。

「おつ、俊介に光ちゃんじゃん。いらっしやい」

「お久しぶりです葉月さん」

「おじゃましてます。」

「まあ、ゆっくりしていきなよ。で、そっちの子は？」

「あつ、わ、私は須藤星姫です。氷村センパイ、よろしく願います」

「ははは、そんな固くならなくてもいいし、葉月でいいよ。よろしくね星姫ちゃん。それにしても正人、家に女の子つれこむとは、いいご身分だねえ」

「じぶんに勇気がないからってってひがむなよ（ボソッ）」

その後、正人の意識は刈り取られていた。

ほとんど聞こえないような声で言ったはずなのに。

結果発表 新たなるクラスは

翌日、俺は俊介と光と星姫と一緒に登校していた。星姫の家も俺たち三人の方向とほぼ同じらしい。これからは4人で登校できそうだ。

「いよいよクラスが発表されるね」

「光ちゃんと正人君は1組に入れると思うけど、私と俊介さんは少し不安ですね」

「お互いに負けたからね。」

「大丈夫だろ。二人とも二回は勝ったんだろ。きっと1組いけるって」

と、正人は笑いながら言う。
俊介も星姫もつられて笑い、少し気分が晴れたようだ。

学校ではすでにたくさんの生徒がクラス発表を今か今かと待ちわびていた。

クラス結果は校舎の壁に張り出すことになっている。

「確か、8時15分に一齐に張り出されるんだよね」

正人は時計を見ながらつぶやいた。

「うん。あと2分ぐらいで張り出されると思うよ」

光も時計を見ながら答える。

「なんか、入試の結果待ちみたいだね。」

「そうですね。ソワソワしているところかがあのときとそっくりです」

「確かにそうだな。あのときは出来が悪くてびくびくしてたなあ。おっ、張り出されるみたいだぞ」

正人が喋り終わるのとほぼ同時に、大きな紙が先生たちによって張り出された。

あちこちで悲鳴や歓喜の声が聞こえてくる。

その光景はほんとに入試結果を待つ受験生のような。

そろそろ自分のを探そうかと思い始めたころ・・・

「やった。私は1組だ」

と光の声が聞こえてきた。

正人も一組の紙のところを見てみると、

18番 須藤星姫

・
・
・
・
・
・
・

26番 橋野俊介

27番 氷村正人

28番 藤田光

と四人の名前すべての名前を確認することができた。
俊介と星姫のほうを見てみると、

俊介は安堵からか、ほっとしたような顔になっており、
星姫においては座り込んでしまっていた。
とにかく、四人一緒に1組に入れて本当に良かった。

「俊介も星姫も1組に入れたじゃねーか」

と少しからかうように言ってみる。

俊介は、

「ほんとだよ、また3組になるかなんて思ってたけど、杞憂だった
みたいだね」

といつも通り笑顔で返してきた。

もう少し、面白いリアクションをしようとかなと期待していたが、まあ俊介だからなと納得することにした。

それとは逆に星姫は、

「べべべべべ、べつに、心配なんてししししし、してなかったからね」

と動揺するどころかキャラまで崩壊していた。

なんでツンデレになってんだよ。

今度からは星姫を弄ってみるのも面白いかなあと思い始める正人であつた。

「落ち着きなよ、星姫さん。みんなで1組に入れたからよかったじゃないか」

「大丈夫です、落ち着いています。それより早く教室へ向かいましょう。」

まだ完全には落ち着きを取り戻してはいなかったが、それもそうだと思い教室へ行くことにした。

教室ではもうほとんどの生徒が来ていた。

俺たちが外で話している間に、もう移動していたようだ。

「私たちが最後だったみたいですね」

星姫が確認しながら言った。

遅いとは思ってたけど、まさか最後だったとはなあ。

まあ、遅れなかったから別にいいか。

ガララと教室の扉の音が鳴り、背の高い眼鏡をかけた女性が教室に入ってきた。

「皆さん、席についてください」

どうやらこの人が担任になるようだ。

なんというか、真面目そうな人だ。

掃除とかサボったらきつく怒られそうだ。

「皆さんこんにちは、私がこの1組を担当する今村美香といいます。これからよろしく願いますね」

と微笑みながらあいさつをする先生。

なんというか、クールビューティーって言葉が似合う先生だ。

現に何人かの男子生徒は落ちかけてるぞ。

大丈夫かこのクラス……

「今日は、今から放送で校長先生の話聞いたあと、昼までクラスについての決め事を決め、自己紹介などをして下校となります。お

昼までには終わると思うので協力してください。放送は9時から始まる予定なのでそれまでは楽しみにしてていいですよ」

9時ってことは、後5分ぐらいか。

ほとんど時間がないので4人で話すことにした。

名もなき校長（実際はわからないだけだが）のはなしも聞き終わり、
ロングホームルーム
現在はLHRの時間。

まずは学級委員長の紹介からだった。

この学校の委員長の選ばれ方は少し特殊で、まず各クラスのクラス替え試験の最高得点者が一番に選ばれ、その人が男子の場合は女子を、女子の場合は男子を委員長自身が選ぶのだ。

選ぶ期間は、新しいクラスが発表されてから二週間以内となっている。

ちなみに、去年4組の委員長だった星姫は、初めから選ばれていたほうの委員長だったようだ。

つまりは、元4組のトップだということになる。

「この度委員長になった護峰院咲だ。みんな、一年間よろしく頼む」

少し、男勝りの委員長のようだ。

こういう人柄のほうがきつとよくクラスをまとめてくれるだろうと正人は思っていた。

あとは、筆記のテストが返されたりして11時には下校となった。

こうして正人は1組として、2年生を迎えるのであった。

任務 事件と不穏な影（前書き）

あけましておめでとつございます。

今年もがんばっていききたいと思います。

任務 事件と不穏な影

とある建物内で

「おいっ、また警察どもがここに入ってきたらしいじゃねーか」

その工場の一室でリーダーと思われる男が大きな声で言う。

そこそこ大きい工場なので、周りにその声が漏れることはほとんどない。

そのため、この男もここをアジトに決めたわけだが。

「すいません。まさかまた入ってくるやつがいるとは思わなくて」

「まあいい。それよりも俺たちのことは気づかれてないだろうな」

リーダーの男は少し殺気をこめて言う。

「大丈夫だよ。気づかれる前に僕が殺つたし」

たった今扉から入ってきた長身の男が言う。

リーダーが放った殺気にも物怖じしていないようだ。

他の手下たちは完全に委縮してしまっている。

リーダーの男は満足げに頷くと

「ならいい。お前がそう言うのなら大丈夫なんだろう。今夜も行くぞ。全員用意しておけ。」

そう言い残し男は姿を消した。

学校の周辺で誘拐事件が起きていると正人が聞いたのは新しいクラスになって1週間ほどたった朝のことであつた。

被害者は6人でそのうちの一人はこの学校の生徒であるらしい。

事件の内容は、夜に一人で歩いているところを狙われるということしかわかっていないらしい。

なんせ、目撃者がいないので詳しいことがわからないのだ。

学校ではもっぱらそのことが話題になっていた。

「はい、みんな席について。」

そんなことを話していると、担任の今村先生が教室に入ってきた。

「今日は、任務^{タスク}が入りました。なので今日の授業はすべて作戦会議^{ブリーフィング}です。詳しい資料は委員長^{委員長}の護峰院さんに渡しておきますので委員長の指示に従うように」

とそれだけを言い、朝のホームルームが終了した。

生徒たちが一斉にざわつき始めめる。もちろんそれは正人たちも例外ではなく、クラス全員が驚いたといっても過言ではなかった。

「みんな、とりあえず私の話を聞いてくれ」

その中で先ほど呼ばれた委員長である護峰院が前に出てきいた。

「皆、いきなり『任務』を出され困惑するのはわかる。私も今朝に言われたばかりだから少し動揺している。何しろ、こんな時期にするものではないからな」

まず任務とは、この学校の単位の一つであり任務、は一年に三回行われる。

その内容はおもに警備や護衛などが多いとされている。

しかし、これは正人たちが後から知ったものなのだが、一組はこの紅魔法学校のトップのクラスなので、少し難しい任務もまわってくるらしい。

クラス同士の連携が重要となるので、普通、初回は夏休みに行われるのが多いのだが、今回は新しいクラスが始まってから1週間という短期間であり、誘拐事件が起こっているという事実もあるので、皆の間で不安が高まっていた。

「今から、この資料に書いてあることを簡単に言うので、それについてしばらく各自で話し合ってもらいたい。無論、わからないことがあったら私に聞いてくれ」

護峰院が話したことをまとめると、今回の任務は廃工場の確認らしい。

もうすぐ解体するので、魔法防護服を着ていき、中に何もなかったことを調べてきてほしいということだ。

生徒のほとんどは今話題の事件とかかわりがないのを知って安堵の笑みを漏らしている。

「よかった、誘拐事件とは関係なさそうだね」

こちらでも光が安心したようにつぶやいている。

「光ちゃんの言うとおりですよ。誘拐犯を捕まえろなんて言われると思ってました」

よっぽど怖がっていたのであろう、星姫も安心したように言った。

「何がともあれ、安全そうな任務でよかったよね……正人？」

その中で正人だけが怪訝な表情を浮かべている。
何かを必死に考えているようだ。

「どうしたんですか正人君？」

星姫が気になって聞いてみた。

「いや、妙だしおそらくは難しい任務になるだろうなって思ってたな」

「ええっ！なんで」

「まずは、いくらなんでもこんな時期にするのはおかしい。クラス同士の連携もほとんど取れないだろうし、あんな事件があった後なのに任務を行うというのもおかしいはずだ」

「確かにそうだけど今回の任務は建物の中の確認だけなんだろう、連

携もあまり必要じゃないし、時期もたまたまの可能性だとしたら不自然じゃあなくないかい」

「いや、連携は絶対に必要だぞ。お互いに情報がいきわたらないと危険だし、工場内つてことはそこそこ広いはずだからバラバラになるかもしれないしな。それに事件の後つてことは余計に気を配らないといけないぜ」

「じゃあ、正人君はいつたいどう思ってるんですか？」

星姫が心配そうに聞いてくる。

正人はそうだな、とつぶやいてから

「まだ確信は持てないが、あの護峰院つて人は嘘ついてるんじゃないかと思ってる」

「『『えっ』』」

正人の言葉に対し、3人はかなり驚いている。
そんな中でも正人は表情を崩さずに自分の考えを伝えていく。

「魔法服を着ていくのも変だと思う。工場内を見回るだけならヘルメットや普通の防護服でいいはずだ。少しは魔法の影響が出るかもしれないが、魔法服を着るほどでもないだろ」

「確かにそうだね。よく考えれば工場を観察して来いつてのもおかしい気がするなあ。そういうのは業者とかがする仕事のはずだし・・・」

俊介が言うことももつともだ。

どんどんこの任務に関する疑問が増えてきたな。
そういえばさつきから何か引っかかてるんだよねあ。

「どうかしたの正人？」

「うーん・・・なんかなあ、試されてるって言えばいいのかなあ。
なんか引っかかるんだよ」

と思ったことを言ってみる。

委員長がたとえ士気が下がるようなことがあり、なにかを伝えたく
なかったにしても、もう少し上手に隠す方法があるような気がする。
それに、なんだか間違いに気が付いてほしいような言い方をしてい
たような気もしたんだよねあ。

「さすがだな、そこまで考え付く人がいるとは思わなかった」

「・・・えっ」「・・・」

いきなり声が聞こえたので振り返ってみると、委員長である護峰院
が後ろにいた。

その顔はとても満足そうに微笑んでいる。

「今からあなたたちにだけ本当のことを話そうと思う。付いてきて
くれ」

その口からは驚くべき言葉が発せられた。

任務 事件と不穏な影（後書き）

今回の話からは任務編を書こうと思っています。

正直、うまく書ける自信が全くというほどではないですがありません（・・・）

でも、一生懸命書くので読んでくれればうれしいです。

それでは、また次回で・・・

感想をいただければ作者はとても喜びます。

目的 白羽の矢が立つ

「本当のことって、僕等のことを騙してたってことかい」

俊介が少し怒ったような口調で言った。

普段、俊介が怒るようなことはめったにないが、委員長が任務のことをすべて話さなかったことには流石に頭にきているようである。他の三人も言葉には出さないが少なくともいい気分ではない。

「すまない、騙そうと思ったわけではないんだ。ただ、今回の任務は今の1組では難しいだろうと思ってな。少し策を講じてみたんだ」

「難しいって、さっき正人が言ってたことのこと？」

「ああ、その通りだ。さっきの君の推理は聞かせてもらったよ。あの推理はほとんど正解だが私の本当の目的まではわからなかったようだな」

護峰院は正人のほうを向き話す。

「聞かせてもらったって、あんたは教卓のところにいただろ。俺たちは後ろのほうの席でそんなに声はって話してた覚えはないんだが・・・」

教室の後ろまで距離は大体6～8mぐらいである。そのうえ、クラス中で話していたのに自分たちの話だけ聞けるのは不可能だ。そう考え護峰院に聞いてみると

「それはだな、風を使って空気の振動をかき集めたり、逆に耳に入

らないように振動をそらしているんだ」

なるほどな、流石は学年主席ってところか。

まあ、風で音を拾うだけじゃなくて、少しは読唇術でも使ってるんだろっけど。

「その話はまあ後でもいいだろう。とりあえずは今回の任務のことを話そうか」

護峰院は4人を見回してから話し始めた。

「今回の任務の場所は廃工場ということは嘘ではないんだ。しかし、内容が問題でな、数日前から建物内で多くの魔力反応が出たらしく、それがなんなのかを調べてきてほしいとのことだ」

「魔力がですか」

星姫が聞いてみる。

「そうだ。それで最近の事件のことは知っているな、私はその犯人のアジトがこの廃工場だと思っている」

「確かに偶然ってことばだけじゃあ片づけられないね」

誘拐事件が発生したのも数日前からで、魔力反応が出始めたところと同じ時期だ。

確証はないが偶然とは言い難いであろう。

「犯人の規模や目的もわかってない以上、この時期では任務の成功は難しいと思っただ」
ミッシェンコンプリート

苦々しげに話す護峰院の姿を見て何もものが言えなかった。
護峰院は委員長としての責任があるのだろう。

「でも、初めから私たちに話さなかったということは何か考えが思いついたってことですね」

と星姫が護峰院に聞いた。

たしか、さつきも本当の目的とか言っていましたよね。

そんな、星姫の言葉を聞き一斉に護峰院のほうを向いた。

「ああ、単刀直入に言うとな、氷村正人、君に委員長になってもらいたいのだ」

「は・・・」

俺に委員長になってもらいたいだつて。

どうかしてるのか、まだ喋って間もない人に委員長になってほしいなんておかしいだろ。

俺は優等生でもないし委員長なら俊介のほうが向いてるだろ。

正人の頭の中ではたくさんの言葉が駆け巡っていたが、混乱していったため言葉を発することができておらず「なっ・・・でも・・・・んな」と、言葉になっていないものが口からもれているだけだった。

「なんで正人を委員長に選ぶのが目的ってこと？」

「いや、そうではない。氷村だけがわたしの嘘に気づいたと言えるわかるか」

と、悪戯っぽく微笑みながら正人のほうを見る。

「なるほど、委員長を選んでおきたかったっていうことか」

やつとともに戻った正人が納得したように答えた。

俊介も星姫も答えに気づいていたが、どうやら光だけわかっていないようだ。

頭の上にいくつかクエスチョンマークがついている。

「正人、どういう意味？」

「このクラスにはまだ男子のほうの委員長がいないだろ。普通はみんなのことをゆっくり観察してから決めるって聞くから、今回ののは委員長を決めるテストってとこだな」

「その通りだ、少なくとももう一人の委員長だけは決めておきたくてな。こうすれば連携も完全とまではいかないがとることができる。もし誰も気づかなかつたら、知り合いのやつに頼もうと思ってたんだが杞憂だったようだ」

「あとはクラスのみんなに本当の任務のことと正人の紹介をして班決めでもしたら一通りのことは出来上がるね」

正人と俊介は完全に内容をわかっているので護峰院とどんどん話をすすめている。

一方、光の方も星姫の解説を聞いて理解したようだ。

「で、正人は委員長をやるのかい？」

「俺は別にいいんだが、お前らは納得するのか」

「私はいいよ。元から正人になってほしいぐらいだったから」

光が微笑みながら答える。

「正人ならうまくやれると思うよ」

「正人君なら安心できますよ」

光に続いて俊介も星姫も答えた。

「なら、俺がやるしかないみたいだな」

「ありがとう、感謝する。あと今回の任務は五人一組で班を作るつもりなんだ。私と君たちの5人で1班として組ませてもらえないだろうか」

もちろん了承し、正人、護峰院、俊介、光、星姫の1班が誕生した。さらに、呼び方も護峰院では長いしよそよそしいだろうということ、お互いに下の名前ですよぶことになった。

「そろそろ教室に入ってこのことを皆に説明しようか。あまり長い時間離れていると不振がられるしな」

「正人委員長の誕生だね」

やめろよ、恥ずかしいと思うも光は弄ることをやめない。
あとで、弄りかえしてやろう、そう決心した正人だった。

「がんばってくださいね、正人委員長」

「しっかりやってくれよ正人委員長」

俊介に星姫までも弄ってくる。

どうやら委員長の仕事も大変そうだ。

反対派 面倒事の予感

「……ということが、今回の本当の任務だ。あと、騙していてすまなかった」

教室に戻り、護峰院改め、咲がみんなに嘘をついていたこと、なぜ嘘をついていたのか、そして正人を委員長にするということを話した。

クラスみんなも、初めはざわついていたが咲の説明と最後の謝罪により納得した様子だった。

「では、氷村正人を委員長に任命す……」

「俺は反対だ」

咲が正人を委員長に任命しようとしたとき、教室の右の方から男の声が上がった。

髪は茶色がかっていて身長は180？ほどの長身の男だった。

どうやら咲と知り合いらしい。

「何が不満なんだ。浮谷」

後から咲に聞いたのだが男の名は浮谷海斗うきやかいとというらしい。

去年の秋から1組にいたらしく、今回のクラス替え試験ではギリギリ一組に残れた。

勉強が苦手だが実技の成績はかなり良く、去年はクラスで暴れてい

たようだ。

「不満も何もそいつら全員前に1組にいなかったじゃんよ。そんな奴らに1組の委員長を任せられるかってんだ」

と不満なことを全く隠さず言い放つ。

「以前がどうあれ関係ないだろう。委員長の私が選んだんだ、文句があるのか」

咲は全く動じずに言う。

もう一人の委員長を選ぶ最終決定権はもとの委員長にある。本当は誰にも言わずに勝手に任命をしていいのだが、今回はことがこのだけにみんなに確認を取ることになった。

仮に今回の任務がなくなるとも、咲ならばみんなに言うであろうが。

咲に正論を言われ浮谷が怯んでいると。

「私も不満……」

と、もう一人不満を持つものが現れた。

「お前もか、弥生」

弥生といわれる女が無言でうなづく。

（こいつは覚えがあるぞ。たしか、咲に続いて総合成績が高かった人だな。

たしか名前は小野寺弥生って言ったっけ。）

小野寺は一年の初めから1組に入っているので咲とは顔なじみである。

なので先ほど咲も下の名前で小野寺のことを読んでいた。

「その人たちは委員長の資格はない……。委員長は別のひとがやるべき……。」

（弥生にも反対されるとわな、どうしたものか。）

二人の知り合いから言われ少し悩む咲。

もちろん正人を委員長から外すつもりはないのだが、二人の、しかも片方は学年次席の人物に言われると流石になにかしなければならぬ。

どうするべきかと悩んでいると。

「あなたたちは正人のことを知らないのになんでそんなこと言うの！？」

「そうです。それに咲さんも言ったように今は1組じゃないですか。資格なんて今この教室にいて十分じゃないですか！」

なんと、光と星姫が二人に向かって大声で叫んでいる。

友達のことを悪く言われたからか、はたまた別の理由からかはわからないが、かなり怒っていることがわかる

浮谷と小野寺が抗議してた時も何も言わなかった二人があわてて光と星姫を落着かせている。

おそらく正人と俊介は抗議があがることは予想がついてたのであるう。

しかし、女子二人の抗議には予想がつかなかったらしくあわてている。

「おい咲、あの二人何とかしてくれ。俺が何言っても止まる気がない」

「あそこまで起こるなんて僕も思わなかったよ」

正人と俊介が困ったようにこちらに話しかけてくる。
どうやら相当怒っているらしい。

正人と俊介が止めることができなかったのは咲も驚いた。

こんなことを考えている間にも光、星姫、浮谷、小野寺の喧嘩(?)は激化していき……

「あなたたちは正人君の強さを知らないからそんなことが言えるんです」

「はっ、あいつが強い？寝言は寝て言いやがれ」

「正人にかかればあんたなんて瞬殺よ、しゅ・ん・さ・っ」

「浮谷が簡単に負けるはずがない……。私と浮谷が組んだらあなたたち4人なんて一瞬……」

「なんですって。あんたたちなんて私と正人で十分よ」

「じゃあやってやろうじゃねーか。今から闘技場来いよ」

「上等よ、正人、行くよ！」

いつの間にか決闘の申し込みをしていた。

「行くよじゃないから。なんで決闘しなきゃなんないんだよ」

「いいから行くの。あいつらに勝ってボコボコ・・・委員長の座を取り戻すの」

「そうですよ正人君、ギタギタ・・・懲らしめてやってください」

「・・・なあ俊介、ボコボコとかギタギタとか聞こえたのは気のせいだよな」

「僕もそう思いたいと言えないね」

かなり、頭に血がのぼってるようである。
特に光なんて目が狩人のめになっちゃってるし。

「いや・・・でも・・・そうだな」

その中で咲は何かをつぶやいている。
それに気づき正人が話しかけた。

「咲、どうした」

「正人、戦ってきてくれないか」

「なんでだよ、お前まで壊れたのか」

「違う！正人と光が組んで戦って勝てば、お前たちのことを皆にわからせることができると思ってな」

少し咲が怒った。

たしかに、浮谷と小野寺に勝てば委員長として認めることができるが、

確実に勝てるという保証がない。

それに、光まで巻き込むのはどうかと思うので、正人は戦わないつもりでいた。

「でも、勝つてもどうせ難癖つけてくるんじゃないの」

「だから、皆の前で戦わせるんだ。そうすればクラス全員が正人の力をみることになる。」

要するにこの騒動を使い、クラスに正人のことを認めさせる魂胆である。

「でも、確実に勝てるかはわからないぞ」

「私は正人と光が勝つと信じてるぞ。それにお前もムカついてなかったわけではないだろう」

咲が挑戦的な目で見てくる。

こいつは……

そんなこと言われたらやるしかないじゃないか。

「わかったよ。やってやる。俺も少しはムカついてたところだ」

「そう言ってくれると思ったよ。みんな、全員15分後に闘技場にきてくれ」

咲の言葉でみんなの前で決闘をすることになった。

どうせやるなら、思いっきりやってやる。

そんなことを思いながら正人も闘技場の方へ歩いて行った。

タッグマッチ 全力勝負

「4人とも防護服は大丈夫か？」

正人たちは闘技場の真ん中で向かい合っていた。

審判は咲がしてくれるらしい。

ルールはクラス替え試験のルールと基本は同じで、違うのは2対2タッグマッチだということだ。片方が負けると強制的にそのチームが負けになるということだ。

つまり、チームワークが重要になってくる。

片方がどれだけ強くとも、もう片方が負ければ終わりだからだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「何この空気？」

先ほどから光と浮谷は無言でにらみ合っており、小野寺は無言で空を見上げている。

正直、帰りたくなってきたんですけど・・・

光と浮谷の間には気のせいか火花が散っているようにも見える。

小野寺は空を見上げるのをやめ、目を閉じて咲の合図を待っている。

「えーと、もう始めていいのか？」

咲までもがこの空気に耐えられず俺の方を見ながらそう言った。
目線で「こいつらを何とかしてくれ」と、訴えてくるのがわかる。
しかたない。

ため息をつきながら正人は光の方に近づき・・・

「ていつ」

とりあえず頭にチョップした。

「いたっ、何すんのよ正人」

「何すんのよじゃないっての。試合始まるからそこまでにしとけよ」

光は渋々といった感じで一步後ろに下がった。

あっちでも浮谷が小野寺に耳をつかまれ、無理やり下がらされている。

ざまあみろ、という声が横から聞こえたが聞かなかったことにしよう。

「もういいんだな。では、両者構えて・・・」

さっきまでの空気とは違い、相手二人から凄^{フレッシュ}い圧力が発せられる。
これは厄介なことになりそうだ。

こちらも緊張を高め隙ができないようにする。

「・・・始め！」

「光、援護を頼む！」

「了解、任せて！」

正人は水氷属性の刀を生成し、相手二人に突貫する。
対して浮谷のチームも、

「小野寺、頼むぜ」

「わかってる………」

浮谷が大地属性のトンファーを生成し正人に向かっていく。

「まずは、お手並み拝見といこうか」

「へっ、そっちこそ簡単にくたばるなよ」

正人が刀を左から右へと横なぎに振るう。

さらに、逆袈裟に斬り上げ、上から下へと一気に斬り下ろす。

浮谷はそれらすべてをトンファーではじき、負けじと正人に殴りかかっていく。

お互いに一步も引かず、魔法抜きの勝負はほぼ互角だ。

「じゃあ、こんなのはとうだ」

浮谷は急に距離を取り、横へステップした。

「何っ！」

浮谷が元いた場所の後ろからは、小野寺が放った地を這う風の魔法波が迫ってきていた。

何か事前に打ち合わせをしていたのであろう完璧なタイミングだ。

「（間に合うか・・・）凍て裂け、氷断牙」

正人も負けじと氷の斬撃を飛ばす。

ギリギリ間に合った正人の技は、正人の5メートルほど前で相殺された。

技を放った後なので、完全に隙ができていた正人の横から、

「よそ見しててもいいのか？」

土塊を纏い大きくなったトンファーを持った浮谷が走りこんでいる。

「やらせないよ」

浮谷は正人を殴れると思ったが、光の放った氷の光線により阻まれる。

二丁の銃で浮谷と小野寺を撃ちながら正人が立て直す時間を稼ぎ、自身も正人のそばへと移動した。

「なかなかやるな。光、気拔くなよ」

「正人こそやられないでね」

（奴のトンファー相手に刀一本じゃ手数で押される、・・・・・・なら）

「光、頼む」

「打ち抜くは迅雷の連砲・・・」

正人が合図すると、光は一度頷くとすぐに詠唱を始めた。しかし、技を阻止するために二人は走りこんできた。

「撃たれる前に止めてやるよ」

「撃たせはしない・・・・・・・・・・。」

威力の高い詠唱は集中しなければならなかったため、動けなくなるのと同じ。

浮谷と小野寺はその隙を狙い光に攻撃を仕掛ける。

「させるわけにはいかないっての」

正人は光の前に出て刀をもう一振り生成し、

「我を守りし白き華よ、スノーフーケ守護の氷華」

正人が前方に大きな氷の華を出現させる。

あと数秒かせげればいい・・・

光の詠唱が終わるまで正人はこの技で耐えるつもりだった。

「そんなもん壊すまでだ。いくぜ！」

浮谷が力を込めると周りの大地がめくれ、浮谷の後ろに集まっていた。

「大地の巨人よ、それを打ち砕きな！金剛神！」
アースゴウラ

大地でできた胸から頭までしかない6mほどの巨人が現れ、浮谷の後ろに浮き始めた。

さらに、小野寺も、

「爆炎の風鎌よ、宿れ！煉獄の大鎌……」
ヘルサイズ

小野寺の手に自分と同じ、もしくはそれ以上の大きさの鎌を生成した。

全体に風が纏っていて、刃にはまさしく地獄を思わせるような紅い炎を灯している。

「おらっ！（くらえ……）」

浮谷がトンファーで華を殴ると、巨人も同じように殴る。どうやら巨人と浮谷は連動しているようだ。

小野寺も女子とは思えないパワーで大鎌を振り回し、華を削っていく。

流石に二人同時の攻撃には耐えられず華はすぐに壊れてしまい、二人の攻撃の余波が正人と光を襲う。

「くっ……」

正人は光の方へ行く流れ弾を斬り、弾き、そらせるがやがて耐え切れず攻撃をくらってしまう。

だが、光の技が完成するには十分な時間を作れた。

「行け、光！」

「…………その者たちに天の裁きを、ホルトフリザード雷雪崩」

いつの間にかデュアルマジック二重魔法にしていたらしく、雪と雷が合わさって二人を襲っていく。

ゴオオオオオオオオオ

雪崩はすべてを洗い流していった。

凄すぎるな…………

エターナルフリザード俺の永久吹雪といい勝負だ。

いや、それ以上かもな…………

倒れた二人は、相当ダメージが大きかったのか気絶している。
防護服があっても、あれはキツイよな。

「勝負あり。勝者、氷村正人、藤田光ペア」

咲の宣言で俺たちの勝ちが決まった。

タッグマッチ 全力勝負（後書き）

正人があんまり活躍していない・・・

決着 魔法と仲間

「おいおい・・・・・・・・俺はまだ・・・戦え・・・るぞ」

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・」

浮谷と小野寺はボロボロになりながらも立ち上がった。

光は全力で撃ったはずだ。それでまだ立てるなんて・・・

光はさっきの技でほとんど体力、魔力ともつきかけてるし、正人もかなりのダメージを受けていたので正直これ以上の戦闘はきつかった。

「どうした、かかって来・・・クツ」

「ウっ・・・・・・・・」

しかし、二人も満身創痍のようだ。

光の大技は確実にダメージを与えている。

「やめておけ、お前たちはもう戦えないだろ」

いまだに戦おうとする二人の前に咲が入り込み、二人を止めた。

しばらくの間沈黙が流れる

そして二人は武器を消した。

「ちっ、わかったよ。悔しいが俺達の負けだ」

「降参する・・・・・・・・」

二人はようやく負けを認めたようだ。

任務は明日なのに相当魔力使ってしまったな。

これで明日戦えるのか……

そんなこと思っている。

「響け、空色の音色」

咲が魔力でバイオリンを生成し、弾き始めた。

心地よい音楽が流れる。

まるで心の中に風が吹き抜けていくようだ。

演奏が終わるとある程度の魔力が回復していて、体が軽くなっていた。

他の三人も同じく回復している。

「咲、これは……」

「ああ、私の魔法演奏の一つだ。オーケストラ 今のは光陽属性の魔法で回復の効果がある」

光陽の魔法か……

特殊二属性は扱いが難しいはずなのに凄いな。

地球上に魔法が存在し始めたのは、およそ150年ほど前だ。

当時、日本の南西の沖縄付近の島に宇宙から直径約20メートルほどの隕石が落ちてきたのがその始まりだという。

幸いその島は無人島だったので人がはいなかった。

たくさんの研究者たちがその島に集まり岩を調べたらしいが、地球上のどの物質とも一致しなかった。

翌日、あまりに大きな岩だったため運ぶことができず、小さなかけらを持ち帰ることしかできなかったが、大部分を切り取って本格的に研究しようということになり、機械が導入された。

しかし、急にその岩は消えた。

目撃者の証言によると、いきなり岩が光だし粒状になって空に消え散ったという。

その一年後に初めて「魔法」が確認された。

最初は指先から小さな火が出たり、水が少量出たりするだけだった。その人たちの体を調べると、あの岩の成分と同じものが血液から発見されたそうだ。

さらに研究していくうちに魔法には5つの属性があることが分かった。

それが、火炎、水氷、雷鳴、大地、風雲の5つだ。

そう、初めはこの五つしか見当たらなかったのだ。

では、どうやって光陽と闇陰の特殊二属性はいつ発見されたのか。

特殊二属性はもとも身体の中にあつた成分と魔力が融合して作られたのだ。

なので、この二つの属性は体の中で作られているので魔力量の個人差が大きい。

しかも、5属性とは種類も違つたため扱いが難しいのだ。

場所は変わってここは教室。

「・・・ということで委員長は氷村正人に決定する。文句はないな
浮谷、弥生」

「わかってるよ。」

「私も・・・・・・・・・・」

二人は納得し、こうして正人は委員長になった。

やっと面倒事が終わったと思って、俺はいったん自分の席に戻った。
次はどうやら班決めをするらしい。

一班5人でクラスの人数は40人いるから8班できることになる。

「では、決まったら私のところに報告にきてくれ」

咲はみんなにそう言い自分は席に戻り何やらノートを開け書き始めた。

真面目な咲のことだ。任務のことを書いて作戦などを決めているの
だろう。

正人はもう班が決まっているので少し休もうと思い、寝ようとして
いたところに浮谷と小野寺が来た。

「どうした、二人して。」

正人が聞くと、

「一応、謝りに来たんだよ。難癖つけて悪かったな」

「私も謝る・・・・・・・・・・」

「別に謝らなくてもいいって。俺もお前も咲に振り回されたただだ

る」

正人は笑いながら冗談めかして言う。
特に何も思っていないようだ。
それを聞き二人はきよとし、

「そうか、俺は浮谷海斗だ、海斗でいいぜ。よろしくな正人」

「私は小野寺弥生・・・・・・・・。弥生で構わない・・・・・・・・。」

「俺は氷村正人だ。改めてよろしくな」

正人は二人とがちり握手した。
頼もしい新たな仲間ができた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129z/>

寒さ嫌いの氷魔術師

2012年1月9日19時52分発行